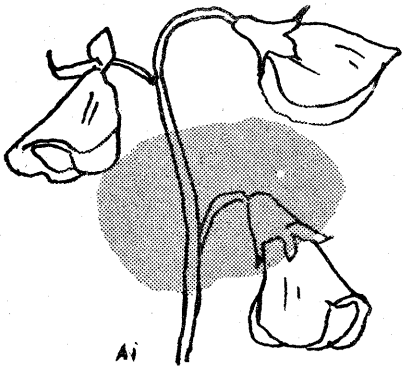
フレーベル以後の幼稚園（3）



津　守　眞

第二章　幼稚園の発展

幼稚園連盟——社会改良と幼稚園　幼稚園という新らしい教育機関が樹立されて、一度び社会から受けいれられても、それが更に大規模に拡張するのには、それだけの主張と、又足場とすべき機関とを必要とした。そして幼稚園が児童救済の機関として如何に価値あるものかを示さなければならなかった。子供達に最善の環境を与えよ、子供達を望ましくない社会の影響から守れ、というのが発展期の幼稚園のモットーであった。いろいろの種類の社会機関がそのモットーの下に幼稚園の設立を助けたが、中でも特に大きな貢献をしたのは、米国各地方につくられた幼稚園連盟である。一八七〇年代からぽつぽつとつくられ始めた幼稚園連盟は、一八八〇年代には著しく増加し、一八九〇年代の末には、米国全国で四〇〇以上に上っている。此らの幼稚園連盟が共通に目指していたことは、第一には若い母親達に、子供の教育と問題とを正しく見て正しく扱うことを指導することであり、第二には、幼稚園を設立して幼稚園運動を促進させることであり、第三には次第に高まってきた博愛主義を実地に行なうことであった。此の第三の点は前にも述べたように発展期の幼稚園の特徴として特に注目すべき点であり、幼稚園が社会的に進出し発展してゆくためにも、欠くことの出来ない要素であったし、又幼稚園運動を推進させる原動力でもあった。博愛主義、即ち人類愛の見地に立つ時に、現実の社会に行なわれている不正、不徳が問題になる。現実の社会の悪から子供を保護し、更に社会改良の一端

を荷うことが幼稚園の使命と考えられた。そこで幼稚園連盟によって設立された初期の幼稚園は大部分、無料の幼稚園であった。此の様な博愛主義が幼稚園運動の促進にどのような力を持ち、幼稚園教育としての実際とどのような関係を持ったかということを、初期の幼稚園連盟の一つを例にとって見てみよう。

一八七八年に、博愛主義者であり演説家として知られていたフェリックス・アドラー博士（Felix Adler）がサンフランシスコで幼稚園に関する一聯の講演を行なった。その中で彼はニューヨークにおけるフリーキンダーガルテン（無料幼稚園）の成果について述べ更に幼稚園設立の必要性について次のように述べている。「不良化予防のために慈善事業をしようとする時にいつもぶつかる問題は、都市の貧困生活からくる悪である。その根源は児童の教育の欠如にある。米国においては、ヨーロッパにおけるほど、社会問題は切迫していないが、われわれは都市生活の貧困ということからくる諸悪がわれわれの社会の脅威となることを防がねばならぬ。我々は幼稚園教育を創設して、それによって来るべき世代を破壊から救うべき使命をおびている」と。（註一）此の講演に刺戟されて、聴衆の一人であった一市民、ソロモン・ハイデンフェルトの提唱によって、サンフランシスコ幼稚園連盟が生れた。此の連盟が後援してシルバーストリート、キンダーガルテンが創られ、ケート・ダグラス・ウィギンス（Kate Douglas Wiggins）が最初の保母となった。彼女は後に「サニーブルック農園のレベカ」「小鳥のクリスマスカロル」等の文学作品を通して知られている。まだ学校を出たてのケートはその保母の最初の日から多くの困難にぶつかった。その幼稚園の附近は貧民街であり、「荒くれた街の悪童達」が彼女の子供達であったからである。その汚い街の袋小路の間の子供達の家庭を訪問している中に、最初は敵対的であった母親達も、次第に献身的なキンダーガルトナー達の努力に友好的な態度を示すようになってきた。ウィギンス女史自身此の間の事情を述べている。「袋小路の間の、子供の家の扉に通ずる階段をよろめきながらのぼった時、その長屋の一番上の窓から一人の婦人のかん高い叫びが聞えた。それは敵対的な口調ではなかった。『ちらかっているものをおかたづけ。がき共の先生がくるよ。子供の守護者が来るんだよ。』ユーリーカ、しめたと思って私は微笑した。こゝでは十分に私は理解され始めている。キンダーガルトナーは子供の主護者になった。此の呼び名に幸あれどんな高貴な尊称も、此の新らしい呼び名よりも嬉しいものはないだろう。」（註二）

こうして幼稚園は社会の底層に触れていった。街角には真鍮のバッヂをつけた子供の守護者が立って、道行く人によびかけた。「皆さん。もしも私達がもっと沢山の幼稚園を開くならば、私達は立ちどころに刑務所を閉鎖することが出来るでしょう」と。

幼稚園は社会改良に貢献するものとして人々に訴えられた。しかし小さな子供達の集まる幼稚園が社会改良と家際にどんな関係があるのだろう。ウィギンス自身云っている。「一寸よく考えてみれば それはいかにも大げさな云い方である。幼稚園が津々浦々にまでつくられゝば、『刑務所は立ちどころになくなるでしょう、皆さん』

と云うようになるだろうか。どんな楽観主義者でも、そう簡単に社会改良が行なわれるとは思わないだろう。もっといろいろの調査が行なわれなければならないし、対策も立てられなければならない。幼稚園はたゞこの穴の一つを埋めようとするだけである。それはやっと子供の足の入る位の小さな穴である。だが大きな世界の仕事の一つである。

「治療というのは過去の声であった。予防というのが今日の聖なる囁きである。幼稚園が社会改良と関係をもつのは、教育という仕事を通してである。教育は悪の蔓延を防ぐということに直ちに賛成するだろう。だが事実我々の過去の教育制度は、我々が希望したような結果を生んだろうか。事実、教育の計画がもっとよくならなければ、人は教育によってより良くはならないだろう。『すべての子供達は学校にゆく』だがそこに行って殆どすべての子供達が教育されない。子供と人間性と、宇宙と生活全体に関する、フレーベルの考え、――幼稚園の考え――は大部分の親や教師達とは些か異なっている。……」

発展期のキンダーガルトナー達は此の様な意識を持って幼稚園の仕事に献身していた。勿論すべての教師達がそうではなかったろうし、実際がどこまで結びついていたかは疑問であるし、又ウィギンスも云っているように、小さな子供の教育と社会改良との間にはまだいくつもの段階がある。けれども社会の博愛主義の風潮と共に、幼稚園が博愛主義に訴える主張を持っていたことが、幼稚園の発展を促がし、その仕事の巾を広くしたことは事実である。単に過去にそういう事実を持っていたというだけではなく、教育全体が社会の向上を目指すものであり、内容と方法を伴ってその方向に廻転しつゞけることが今日の問題でもある。

さて、こうして各地に生れた幼稚園連盟によって実際に行なわれた事業として次のものを挙げることが出来る。

(1) 母親学級が各地に作られ、婦人達の教育問題に対する関心が養なわれ、幼稚園設立の母胎ともなった。母親達は次第に局部的な小さな会合では満足せず、数日間に亘って共同宿泊会合、キャンプ会合も行なわれ、子供を同伴して共に教育を受けるような試みも行なわれた。一八九七年には、それらが結成して全国母親連合が生れている。

(2) 幼稚園の設立はその主たる事業であった。市によっては市中の幼稚園が全部幼稚園連合によって設立されたものであった。一九一二年の統計によると、米国全国で二百九十七の幼稚園が幼稚園連盟の設立によるものであり、全幼稚園の四分の一に当る。千八百年代の終りにはその数がもっと多かったものと想像されるが、詳細は明らかでない。

(3) 大都市の貧困問題に対して、婦人達を啓蒙したこと。母親達は児童研究によって教育に関する関心を高められたが、同様に、幼稚園連盟を通して貧困問題と直接に触れる機会を持ったことから社会問題に関する関心が高められた。そして当時起ったばかりの社会学の研究グループが作られ、職業指導所、遊園地、セッツルメント等の活動が行なわれた。

40頁に続く

第一節　教育課程の評価の必要
第二節　評価の着眼点

これは、前掲の委員会の要項と比較すれば一見してわかるとおりその答申をもとにして、それに補筆訂正を加え整理したものである。その後、新しい方針のもとに、初等教育課内で研究協議が進められた。そして、昭和二十九年一月には指導主事教科別連絡協議会（文部省主催）幼児教育分科会に、幼稚園の教育目標（案）が発表され、それについての意見が求められた。（註3）くだって今年八月には全体の草案ができ上り、そのうち、最も重要であり各幼稚園に直接関係の深い部分の中間発表となったのである。

註1

「幼稚園教育の要領」「幼稚園教育要領」と二様の名称を使っておるが、これは、最初は幼稚園教育の要領と呼んでおり、後になって「の」の字を除き幼稚園教育要領となったのである。従って、最初のうちは「の」の字をいれるのが正しく、現在は「の」の字をとって幼稚園教育要領というのが正しい。

註2

昭和二十二年は幼稚園数一、四八〇（国立三三、公立六五八私立七八九）、幼児数一九七、五六九（国立二、五四一、公立九五、六三一、私立九九、三九七）であった。参考までに昭和二十八年五月の統計を示すと、幼稚園数三、四二二（国立三二公立一、二八八、私立二、一〇二）、幼児数五一八、九一九（国立三、〇四七、公立二一〇、五八四、私立三〇五、二八八）である。（いずれも文部省調べ）

註3

指導主事協議会で発表された幼稚園の教育目標やその時の会議の模様は『昭和二十八年度指導主事教科別連絡協議会幼児教育分科会記録』（文部省初等中等教育局発行）や『幼児の教育』第五三巻第四号参照。

（千葉大学教育学部）

× × × ×

49頁より続く

(4) 幼稚園教育養成所の設立、幼稚園連盟によって設立された養成所の教育は、間接的に博愛社会事業の訓練であった。そして児童及び社会に対する道徳的義務が特に強調された。（註三）

註一　Marwedel, E.: Kindergarten in California, In H. Barnard Kindergarten and Child Colture, 1881, p.665～672

註二　Wiggins, Kate Douglas: The Relation of Kindergarten to Social Reform, In K. D. Wiggins, Children's Rights, 1898, p. 107～138

註三　Vandewalker, N.C.: The kindergarten in American Education, 1908